

岡山県航空協会の大森章夫理事(左)岡山市平田の携帯電話が鳴ったのは一月二十九日午後五時。「岡山からインドに救援機を飛ばしたい。力を貸してほしい。」国際医療ボランティア・AMDAの菅茂代表(右)からだった。

「やりましょう」。即座に答えた大森理事は電話を切るや、懇意にしている東京の航空コンサルタント業者にダイヤル。チャーター機の手配に取り掛かった。

同協会は一九九五年のサハリン地震、翌年の中国雲南省地震の際にもAMDAの救援機派遣に活躍。インドの惨状を報道で知っていた大森理事は、今回も連絡を予想していたという。

救援機 飛ぶ

その夜には、ロシア・ウラジオストク航空の貨物機を派遣することが決まった。「救援機を飛ばすのは久々。忙しさの中にも充実感があつた」と大森理事は話す。

出発は二月一日午後。残された時間は一日半しかなかった。

AMDA本部(岡山市椿津)では翌三十日から、戦場のような日々が始まった。全国から送られてくる救援物資のリストアップ、パワースイッチの調達、通関の手続き。AMDA側の熱意に周囲もこたえた。

2日半

一日十数便、多い時間帯には三十分間隔で定期便が発着する岡山空港。使用申請を受けた岡山県岡山空港管理事務所(岡山市日応寺)は、滑走路や駐機場所の調整を急ぐとともに、空港内の格納庫を救援物資の集積場として開放することを決めた。

荷物の積み込みなどを担当する業者も、急ぎよ人を手当てして救援機の受け入れ態勢を整えた。両備バス・スカイサービスサライスカンパニーの桑原

官民の力を結集し運航

彰一郎取締役(左)は「めったにない機会。誇りを持ってお手伝いさせていたがいた」と話す。

救援機に同乗する五人の支援チームの出国手続きや、空港の制限区域内外への立ち入り許可の準備なども、関係機関の協力で着々と進められた。

出発を翌日にひかえた三十一日正午ごろ、スタッフを青さめさせる事態が起こった。ウラジオストク航空側が(着陸地であるインド)アーメタバード国

際空港の着陸許可が下りないと連絡してきたのだ。

ここで動いたのがインドの隣国・パキスタン出身で、AMDA事務局長を務めるカーン・マハムド・ザマンさん(三三)。インド大使館や同空港に自ら電話を入れ、被災者のための重要な便であること、一刻も早い許可が必要であることを切々と説いた。その日の夕方、同空港からAMDA本部に許可証がファクスされてきた。

インドとパキスタンは領土問題などで友好関係にはない。「困ったら助けたい、だれもが思う。絶対に飛ばさなければと思った」とザマン事務局長は振り返る。

二月一日午後六時半すぎ、AMDAスタッフやボランティア、空港関係者ら約五十人が見守る中、救援機は岡山空港を飛び立った。多くの人々の熱い思いを乗せて。

この連載は社会部・中田秀哉、小野暁、井上建吾が担当しました。



被災者らに毛布を配るAMDA調整員(右)。多くの人の力で救援物資は無事、届けられた。5日、ラムナガール村(AMDA提供)

「助きたい」熱い思い乗せ